「日々の理科」（第 828 号） 2016（H28）,10,12

「はさかけのある風景（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

高崎市の倉渕地区（旧倉渕村）では、今がちょうどイネの収穫時期で、収穫前の区画と、すでにはさかけになっている区画が混在していた。

刈ったあとの田に稲木を組んで、その上にイネの束を逆さにかけてある。高さは地面から「よいしょ」とイネの束をあげれば、掛けられる程度のものだ。単純な構造だが、非常に機能的だと思う。

左下の写真は、まさに「はさがけ」の作業中のものである。横棒は３段になっていて、下の段からイネの束をかけてゆく構造だ。全部かけ終わると、どの段も稲穂の部分が、陽に当たるように調整されている。

「はさかけ」の中には、最上段にビニールシートをかぶせてあるものもある。これで秋雨が降っても、少しは防げるのだろう。

「はさがけ」をしたばかりの稲穂は、まだ色が薄く、少し緑色も残っている。しかし、何日か経ったものは、だんだん色が濃くなり、飴色をしてくる。この稲籾の中で、お米も「熟成」しているのだろう。不思議だったのは、これだけの「ご馳走」があるのに、スズメが一羽もいなかったことだ。何か秘密があるのだろうか。